

第34回夏期福音特別集会 (3) (箱根)

霊的人物

――マタイ伝第7章1～29節――

1987年8月22日

小池辰雄

キリストの前に降参 無条件の世界 主体は向う側 今直ちに 生命の質は愛 われ愛す キリスト直結 神さまの凄い言葉 その詩は簡単には分からん 愛されたいように愛せよ 天道 地路 無門の門 ドラマチックな神学 御霊のひと 原始力 霊的人物

【マタイ7】

1 なんじら人を審く^{さば}な、審かれざらん為なり。 2 己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量りにて己も量らるべし。 3 何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木^{うつぼり}を認めぬか。 4 視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟の目より塵をとり除かせよと言い得んや。 5 偽善者よ、まず己が目より梁木^{うつぼり}をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

6 聖なる物を犬に与うな。また真珠を豚の前に投ぐな。恐らくは足にて踏みつけ、向き反りて汝らを噛みやぶらん。

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。 8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。 9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、 10 魚を求めんに蛇を与えんや。 11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。 12 然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

13 狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者おおし。 14 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

15 偽預言者に心せよ、羊の扮装して来れども、内は奪い掠むる豺狼なり。 16 その果によりて彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。……

21 我に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。 22 その日おおくの者、わ



れに對^{むか}いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐^おいだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為^なししにあらざや」と言わん。²³その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断^つえて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離^{はな}れされ」と。

²⁴さらば凡^{すべ}て我がこれらの言をききて行^いう者を、磐^{いわ}の上に家をたてたる慧^{さと}き人に擬^{みな}せん。²⁵雨ふり流れ漲^{みな}り、風ふきて其^その家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。²⁶すべて我がこれらの言をききて行^いわぬ者を、沙^{すな}の上に家を建てたる愚^{おろ}かなる人に擬^{みな}せん。²⁷雨ふり流れ漲^{みな}り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛^{たお}倒^れはなはだし』

²⁸イエスこれらの言を語りおえ給^{たま}えるとき、群衆^{ぐんしゆ}その教^{おしえ}に驚^{おど}きたり。²⁹それは学者らの如^{ごと}くならず、権威^{けんい}ある者のごとく教^{おしえ}え給^{たま}える故なり。

●キリストの前に降参

「なんじら人を審^{さば}くな、審^{さば}かれざらん為^{ため}なり。²己^{おの}がさばく審判^{さば}にて己^{おの}もさばかれ、己^{おの}がはかる量^りりにて己^{おの}も量^りらるべし。

大体、人を裁^さぐ資格^{しつご}がないですから。

³何ゆえ兄弟の目にある塵^{ちり}を見て、おのが目にある梁木^{うつぼう}を認めぬか。もの凄^こい言葉^{ことば}です。梁木^{うつぼう}は大きなものだから。

⁴視^みよ、おのが目に梁木^{うつぼう}のあるに、いかで兄弟の目より塵^{ちり}をとり除^とかせよと言^いい得^えんや。⁵偽善者^{いつはり}よ、まず己^{おの}が目より梁木^{うつぼう}をとり除^とけ、

人間は梁木^{うつぼう}をとり除^とき得^えない。これが自我^{じご}というもの、自我^{じご}という「梁木^{うつぼう}」です。「とり除^とけ」と、キリストはおっしゃるけれど、できない。できない事をキリストはおっしゃる。キリストは不可能^{むべからず}を突き付ける。だから、

「できません、参^{まゐ}りました!」

と言^いわなければダメなんです。

今日^{けふ}、最初^{さいしょ}に

「いよおなき我^{わが}を 血^ちをもて贖^{あが}い

イエス招^{まね}き給^{たま}う み許^{もと}にわれゆく」

という讚美歌^{讃美歌}(271番)を歌^うつたのはこれと関係^{かんけい}しています。「み許^{もと}に行く」よりか仕^し方がない。「み許^{もと}に行く」も「み許^{もと}に帰^{かえ}る」も同じ^{おな}じことです。行くも帰^{かえ}るも同じ^{おな}じこと。信仰^{しんぎやう}は正^{ただ}に行^いなんです。

自己^{じご}義認^{ぎにん}、自己^{じご}主張^{しゆじやう}、自己^{じご}弁護^{べんご}、これがみんな「梁木^{うつぼう}」です。それを「とり除^とけ」と。それが本^{ほん}当^{とう}にとり除^とけられれば、無我^{むが}となれば、明^あらかに見^みえる。

さらば明^あらかに見^みえて兄弟の目より塵^{ちり}を取りのぞき得^えん。



「塵があるよ」なんて言うのではなくて、塵を取り除いてやる。

「そうかい、ゴミがかかったかい。ゴミを取ってあげる。刺とげがさしたか、刺を抜いて上げる」

と。素晴らしいね、これは。

「隠れたるに、見給う、聞き給う神に」

という6章の始めの祈りの所も大事だと言いました。

「自分の目の梁木うつはりをとり除け」

と。これは、キリストの十字架が取り除いてくださるので、自分ではどうにもならん。

「できません」

と言って降参しなければいかん。福音書に来て、キリストの前に降参するまではその世界に入れない。それを、一生懸命で修行しようとしてる。

「潔きよかれ」

なんて言ったって、潔くなれるか。

●無条件の世界

「求めよ、然らば与えらる。尋ねよ、さらば見出す。門を叩け、さらば開かる」

と、私ははつきり書いた。

「与えられん」

ではない、

「与えられる」

です。みんな直説法現在です。私は新約聖書を訳したら、こういう訳ははつきり書くから。ギリシア語がどうだって、そんなことは構いやしない。キリストが

「ちよつとそれは言い過ぎだよ」

とおっしゃっても、私は

「いえ、あなたはしてくださる」

と答える。

信仰は無条件の世界です。相対的現実で開かれなくたって、いいではないですか。その奥の現実では開かれています。そういう、凄く絶対次元の世界を、この相対の中にあるながら、生きるような生き方、これが本当にキリストを生きるということになる。躓いても、ころんでも、そんなことを苦にするな。

ブラウニングが言った、

「こころ転ぶは起き上がらんがためである。空の曇るは晴れんがためである」

と。あのブラウニングの辞世は、

「私が逝いったら、歓呼して送ってくれ、万歳と言って送ってくれ」



という本当に積極的な言葉です。

日本みたいな不信の世の中、学校なんて言ったって、しょうがない。吉田松陰式な塾、本当の意味で熱的な教育が、人物をつくる教育が本当の教育なんです。だから、今日は標題に『靈的人物』と書いた。今一番少ないのは、日本で欠けているのは、この靈的な人物です。政界には一人もいない。

●主体は向う側

この271番の讚美歌「いさおなき我」は、私の大好きな讚美歌の一つなんです。

- 1 いさおなき我を 血をもて贖いあがな
イエス招き給う み許にわれゆく
- 2 つみとがの汚れ 洗うによなし
イエス潔め給う み許にわれゆく
- 3 うたがいの波も 恐れのあらしも
イエス鎮め給う み許にわれゆく
- 4 ころこの痛手に 悩めるこの身を
イエス医し給う み許にわれゆく
- 5 たよりゆく者に 救いといのちを
イエス誓い給う み許にわれゆく
- 6 いさおなき我を かくまで憐れみあわ
イエス愛し給う み許にわれゆく

「求めよ」ではない。

「イエスの方で招いてくださる」だから、行きます。

「イエス潔め給う」だから、行く。

「イエス鎮め給う」だから、み許にゆく。

「イエス医し給う」だから、行く。

「イエス誓い給う」

「イエス愛し給う」

と、全部キリストが主体なんです。だから、

「私は行かざるを得ません」

という。

「求めよ、たずねよ、叩けよ」

というのは、

「私がお前を求めているよ。私がお前を尋ねているよ。私がお前の魂の扉を叩いているよ。」



ということですよ。だから、

「求めよ、必ず与えられる。尋ねよ、必ず見出す。門を叩け、必ず開かれる」

なんです。求め貫ぬくんです。尋ね貫く。一回やそこらではないんだ。叩き貫く。ノックではない、全身でぶつ倒れるまで体当たりする。キリストの方で、与えよう、開こう、見出されようとなさっている。いつも、主体は向う側なんです。

こちら側の姿は、現状はどうであつてもいい。福音の世界は道德の世界とは違うんだね。キリストが入って来ると、これは「モーセの十戒」どころの騒ぎではない。もつと凄い、道德の世界になる。徹底的な憐あわれみの世界、徹底的な義の世界です。この福音というものは、「福音」という言葉が当たるかどうか分からないと思うくらいです。いわゆる「幸い」や「しあわせ」なんていうものではない。「よろこび」と言った方がいいかも知れない。福音というものは本当に「よろこびの音信おとずれ」なんです。何があつても、神を讚美し、キリストを讚美することが人生の本当の姿です。

与えられるのはキリストですから、求めるのはキリストですから、私達はこちらの状態如何にかかわらず、キリストを求めて、キリストは下さらないことはないんだ。

片一方の十字架の盜賊は、

「せめても覚えてください」

と平伏したら、キリストは

「お前は今日私と一緒にパラダイスだ」

と仰つた。これは私の大好きな言葉です。

「汝、今日、われと共にパラダイスなり」

という。これが、キリストの福音です。

十字架は「ブラックホール」であると共に「ホワイトホール」でもある。罪はあそこに全部収集されている。しかも、それは全部贖あがなわれていることにおいて、ホワイトホールになっている。

●今直ちに

キリストを尋ねて、尋ねそこなうことがないし、キリストを叩いて叩きそこなうことがない。これは黙示録に書いてある。

「視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その

内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん。」(黙示録3・20)

「私は戸の外で叩いているよ。御馳走と一緒に食べるよ」

と、キリストの方で叩いているんだから。叩いているのに、気が付かないで開かない場合が非常に多いわけです。この

「求めよ、尋ねよ、門をたたけよ」



は全部、

「キリストという方を求め、尋ね、キリストという門を叩く」
だから、必ず与えられる。今、直ちに！

私は語りながら、あなた方は聞きながら、その現実^{まこと}に直ちに入らなかつたら、虚しい。

「ああ、主様！ 有り難うございます。あなたでしたか。あなたの他に何にも要りません」

と。

「主を持つ者は一切を持つ」

宇宙を持つと、パウロが言っているとおりに。パウロの書簡の中には、熾^{さか}んな言葉がある。あれはもう、大変な交響楽だ。

その次にちゃんと書いてある。

8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。

これははつきりそうです。答案がちゃんと出た。

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与え

んや。11 然らば、汝ら悪^あしき者ながら、善^たき賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善^たき物を賜^{たま}わざらんや。

「善^たきもの」とはルカ伝には「聖^た霊」と書いてある。

「聖^た霊を賜^{たま}わざらんや」

ということ。善^たきものはただ一つ、聖^た霊です。善^たきものはただ一つ、神^{かみ}さまです。キリストがそう言ったんだから。

「なぜ私を善^たいと言うか、神の他に善^たきものなし」

と。ナザレのイエスは自分を何者ともしなかつた。そうしたら、

「ゼロ＝無限大」

であった。私達も、キリストが破れ器を通して光り給う、生き給う。いわゆる信仰でなくなった。そういう物凄^{うつつ}い現^まの世界です。滅びない永遠的な現在の世界、御国が来ている世界、未完成の完成の世界です。未^ま完成交響楽だ。

● 生命の質は愛

12 然らば凡て人に為^せられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法^{おきて}

なり、預言者なり。

いわゆる「黄金律」です。

「して貰いたくないことはするな」

という否定的な言い方が孔子の言葉にあるけれども。

「人に為^せられんと思ふことは為^せよ」



と、キリストは無条件な言い方をなさる。

「こういう場合はどうですか？」

なんて、すぐ頭の人は考える。バカだよ。利口は馬鹿で、馬鹿は利口という。学者というのは、すぐいろんな場合を考える。福音の世界はいろんな場合は要らない。すべての場合に通ずるものを持っている。無条件の世界はそんなんです。あらゆる場合に通じてしまう。

「人に為られんと思うこと」

とは何ですか。一言でいうならば、愛されることですよ。

「愛されたいように愛しなさい」

と。私は一言でいうならば、キリストの言葉はそうだと思っている。どんな動物でも、あらゆる動物は愛に飢えています。動物は感覚的に鋭いから、愛をもつて接しない人には近づいて来ない。本当の生命は愛を持っている。愛のないものは生命ではない。

「生命の質は愛なり」

という。「生きている」ということは愛しているということ。愛していない人は、生きていないということ。その愛は神・キリストを通してやって来る。そういう無条件の世界です。愛を分析する必要は一つもない。

●われ愛す

「私はお前を愛している」

と。旧約聖書のイザヤ書、第二イザヤに、

「われ愛す」

という言葉がある。何を愛するか書いてないんだ。「われ愛す」という目的格がない。「われ愛す」ということは、

「神は愛なり」

と同じことです。一切を神は愛する。「われ愛す」というのは、神の愛、キリストの愛が本当に入ってきて来ると、

「我は愛なり」

ということになる。これは一切に勝つ。一切に勝つとは一切を救い上げるということ。全てを救い上げる。どんな事態に対しても、この愛にはかなわない。

その愛の極致は十字架です。

「この十字架の愛がそのまま済んでたまるか」

ということ。だから、キリストは復活せざるを得ない。神さまはこれを甦らさざるを得ない。そうして、

「この愛は必ず今に霊として来るぞ」

と。これが聖霊です。聖霊は愛の霊ですから。愛はそういうように貫いている。本当に圧



倒される。その現実が御国、天国なんです。

●キリスト直結

人類は、もし神さまがなければ、

「空くうの空なるかな、全て空なり」

と、『伝道の書』が言う通りです。みんなこの世を去って行く。その先どうなるか分からん。地球は、そのうちに、いろんな要素が行き詰まって爆発する。行き詰まると、核戦争になる。サタンの勢力の中に入って、やけくそになるから。

キリストの生命、キリストの力、キリストの霊をただかかないで、そういう非常に危機的な、どうにもならない人間の現実を、歴史の現実を突き抜けることができるか。我々は「神の民」というなら、それ以下のものではダメなんです。

「カトリックの、プロテスタントの。教会の、無教会の」

なんのканのではない。キリスト直結です。だから、私は『原始福音』という詩を書いた。

「根源存在ことばからイエスは降臨した。

彼の言ことばは今も霊歌の如く響く。

彼の地上の生存は原始自然的であった。

彼の生きざまはあらゆる主義や文化を超えていた。

新教でもなく旧教でもなく

使徒的にキリストに直結して我らは

彼らの如くみ霊に在って生きん、

彼らの如くキリストに祈入せん。

彼の言の本質は霊にして生命、

キリストに在って生くるは使徒すがたらの相

霊賜カリスマ的な力は彼らの口を通して能はたらいた。

我らは然るべき処で聖書の中から告白しよう。

我らは信行しんぎやうをもって深く柔軟に生きよう。

彼の十字架と聖霊は我らが信仰の根源である。」

(1987年4月24日深夜 『エン・クリスト』31号掲載)

キリストの言葉は「霊歌」です。彼の地上の生存は全く自然と一つです。「然るべき処」とはいたる所と同じ事です。この「柔軟に」という言葉は自由自在にということです

●神さまの凄じ言葉

ところで、イザヤ書65章の、

「我はわれを求めぬねびりしものに問いもとめられ、我をたずねぬねびりしものに見出



され、わが名をよばざりし国にいえらく、われはここに在りわれはここに在り」と。(イザヤ65・1)
この言葉はやはり凄い。

「尋ねない者に見出され、わが名を呼ばざる者に、私はここに居るよ、ここに居るよ、と言った」

と。もう、旧約から神さまの凄い言葉が響いている。この第二イザヤには、私は驚いている。今、愛と言いましたけれども、

「エホバいいたまえり。誠にかれらはわが民なり。虚偽をせざる子らなり」と。かくてエホバはかれらのために救主となりたまえり。」

自分をぶちまける者が、この「虚偽なき」ということ。そのために「救主となった」と。

「かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いて、その面前の使をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫とによりて彼等をあがない彼等をもたげ、昔時の

日つねに彼等をいだきたまえり。」(イザヤ63・8～9)

と、たたみかけて書いてある。こんな凄い言葉があるかと思う。参ってしまう。イザヤ書は時々読んでください。もうここに福音が隠されている。

「ご飯を食べなくても、聖書を読まなければ、私は眠るわけにいきません」というようなことになって来る。

●その詩は簡単には分からん

私の著作集第十卷(『聖書は大ドラマである』1988年11月刊)は全聖書の縮刷版みたいなものだ。粹の言葉が選んである。私みたいな者が世界の大神人ゲーテやダンテをなぜ相手にできるかという、聖霊が来たからです。だから、普通の人達は私のことを

「あれはちよつと、おかしいのではないか。十年も経ったら世界的な詩を書くなんておおぼら吹いてる」
と思うだろうね。

「先生はやつぱり書かなかった」

なんて。そうはいかんよ。必ず書く。書かなければ死ぬわけにいかん。向こう側に行けない。「ちよつと待てー!」

と言われてしまう。このボロ器をつかって、この福音の証しを、内村先生の祈りを現実にしてやるから。

「そうか、日本では、本当の福音がこの様に表現されたか」

と、世界をおどろかしてやるから。その詩は簡単には分からんよ。簡単に分かってたまるものか。



●愛されたいように愛せよ

「愛される如く愛せよ」

と、今日初めてこのことをはつきり言いました。

「これは律法なり、預言者なり」

とは、「これは旧約聖書なり」ということ。

「旧約聖書の総括は愛されたいように愛せよということだ」

ということを、キリストが言われたわけです。

¹³狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者

おおし。

¹⁴生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

「狭き門」だという。

「ラクダが針の穴を通るよりも、金持ちがそこに入る方が難しい」

と。神さまの側に、いわゆる守銭奴は入れない。マンモン(富)に仕える者は入れない。狭い門、これは自分が一人しか入れない。何か物を持って入れない。素手で、何も持たないで通らなければ入れない門だ。

では、何を持っていくか。魂の中に聖霊を持っている。その者はこの門を入れる。

「聖霊無き者はこの門に入ることができない」

ということだ。十字架を受けとり、御霊を受けとらないと、「狭き門」より入れない。

●天道地路

「狭き門」、これはよく入学試験のことに使う。あれは困ったものだ。入学試験は広き門の方がいい。誰でも入れて、ただし、入ってからは、怠けていたら出してしまふ。

この節には特に「路」という字が書いてある。「道」でない。我々が各々の足で歩く所を路という。道は天下の大道という。我々一人びとり歩くこの路が、天の道、天道に即するか即さないかが問題なんです。天道地路という。この地路は各々、みんな特殊の路で、

「他人の路を歩くのではない、自分の路を歩く。それがこの天道に即しているか」ということ。この即するということが大事なんだ。

この召団は皆それぞれです。みんな自分の路を歩いている。ただし、それが一つの天道に即しているか。この天道の質はキリストの霊です。

「我は道なり」

という道です。

「このキリストという道に即して歩いているか」

路がみんな同じような路だったらダメだ、そんな類型的なものは。ひとを羨むことは一つも要らん。羨み、妬み、争うことは一つも要らん。何しろ、聖霊の世界に入ると問題がな



なくなってしまう。みんな解決してしまうから。何があっても、行き詰まりを知らない。自在に処していく。これが、パウロが言った、

「一切の秘訣を得たり」(ピリピ4・12)
 という世界です。

「こういう場合にはこうだああだ」
 と、そんな条件は一つも要らない。全部、自然に処理して、対応できる。これが奥義の世界です。

● 無門の門

しかも、キリストという門はいたる所にある。

「この教会でなければならぬ、この幕屋でなければならぬ、この召団でなければならぬ」

ということは一つもない。至る所に門がある。だから、むしろ、それは無門なんです。門が無い。キリストという方は無門の門なんです。

「どこの教会に行かなければならぬ」
 とか、そんなことは一つもない。

「その中にキリストという門が本当にあるか」

それだけが問題なんです。どういう在り方だっいいい。一人一教会でもいい。

「二、三人わが名に在りて集まる所には、我もその中に在るなり」(マタイ18・20)

という。「二、三人」が極致になつて一人になる。

「二人、我と共にあるところ。我なんじと共に、われ汝の中に」
 ということ。ダンテが、

「二人一党である」

と言った。いろんな党派があるが、ダンテはたった一人なんです。

「かれらの行為は獣の如きその性の証とならむ、されば汝唯一人を一の党派たらしむる

かた汝にとりて善かるべし」(天国篇第十七曲、山川西三郎訳)

一人一党である。今の教会はしようがない。パウロやペテロに散々そむいてる事をやってるが、しかし、パウロもペテロも生きているぞと。ダンテの『神曲』の「天国篇」にある言葉です。

21 我に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいま
 す我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。

「信ずる者」とは書いてない。

「御意を行う者のみ」



と書いてある。これは義人なんです。義人だけが「御意を行う者」です。義即愛です。本当の愛の人だけが天国に入る。

だから、福音の世界は――カトリックの方では行為を非常に尊重する気持ちも分かりますが――信仰と行為を分ける必要がない。

「信仰それ自身が一番烈しい行為である」

という。「信」とは、全存在的にキリストの中に自分を投げ入れることだから、これは一番根源的な行為なんです。信即行です。キリストの中に入ると、行ぜざるを得ない。動かざるを得ない、語らざるを得ない。

●ドラマチックな神学

この特別集会は、そのもの凄いな原動力を――それは尽きない原動力だから、語るも聞くも同じこと――

「我々はそれをお互いにいただいて山を下って行きましょう」

と、やっているわけだ。いわゆる修養会でも何でもなし。キリストをいただく会だ。

「我は炎なり」

と、あなた方の存在から火が発しているようになる。来年会うと、みんなは変わってしまったっているわけです。変わっていないようだが、どんどん変わっている。

「栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり」(コ

リント後書3・18)

とパウロが言ったたではないですか。愉快だね。パウロの書簡は私は楽しくてしようがない。普通は

「パウロ神学は難しい」

と言っているが、何を言ってるか。パウロは活きた神学をもっているの、「組織神学」ではない。もし、神学というなら、これはドラマチックな神学です。私は『無の神学』(小池辰雄著作集第三巻 1982年5月刊)を書いたが、誰も私の言う事なんか聞きやしない。いいです、それで。

「捨てられたる石は隅の首石となる」(マタイ21・42)

と。これはキリストの好きなお言葉です。天国は捨て石でもって築かれていく。

皆さん、そういうところに烈々たるものが働くんですよ。悄気しよげているのではない。いろんな事に出くわせば出くわすほど、逆に力が働いて来る。始末がわるい。

「どうも私はこの頃スランプです」

なんて、何を言ってるか。人間の側なんか見るな。私は、聖霊の力を証しするために、百歳も突破しようと思っている。何も長生きしたいのではない。

「御霊の力はかくの如きものだぞ」



と証明するためです。それは、ただ生きるのではない。使命がある限り、仕事を。

●御霊のひと

ところが、面白いことが書いてある。

22 その日おおくの者、われに對^{むか}いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐^おいだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為^なししにあらずや」と言わん。23 その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

どうですか、これは。キリストの名を借りて、霊的な奴が――この霊的な奴はサタンだ、名を借りるのは「白きサタン」だ――力ある業ができるんです。霊の世界だから、同じような現象が起きる。けれどもどつこい、それは違うぞ。

「み意^{こころ}が行われてい^らるのではない。サタンの働^{はたら}きがや^つてるんだ」と。これは恐ろしい言葉です。

「私は霊的にな^った」

なんていうのは大間違いです。私が「霊的人物」と言^つたつて、そこは間違^わないでください。「御霊のひと」と言^つた方がい^い位です。だから、本当にキリストの前に平伏^{ひれ}しの魂^{たま}でないと、サタンの虜^{とりこ}になる。他の霊でも霊的な力はサタンの方が大いに働^{はたら}くから。サタンの特色は高慢である^{こと}です。

「霊的傲慢は一番の罪だ」

と、マルチン・ルターも「マリアの讃歌」の中で書^いている。キリストもサタンと戦^{たたか}う時に、自分の霊的な力^{ちから}で戦^{たたか}ったのではない。全部、神^{かみ}です。サタンは

「聖書にこ^うあるではないか」

と、み言葉を使^{つか}つて来る。サタンがみ言葉を悪用^{あくよう}する。キリストはそれを見抜^{みぬ}くから、あの三つの言葉はみんな、それでキリストはサタンをや^つつけた。

「神^{かみ}を畏^{おそ}れよ。ただ奇跡^{きせき}を求^{もと}めるのではないぞ」

と。だから、

「**霊の貧^{さい}しき者は恵^{さい}福^{わい}なり**」

という言葉が一番先にあ^つたんです。神の前に平伏^{ひれ}しの、自分を何者^{なにもの}ともしない姿^{すがた}がキリストの一番本^{ほん}当^{とう}の姿^{すがた}です。そこに神のみが働^{はたら}き給^{たま}う。我々^{われら}においてはキリストのみが働^{はたら}き給^{たま}う。こちらの事^{こと}ではない。それだけキリストに捕^{とら}われていると言^いうか、何^{なに}と言^いうか、もう言^いいようがない。愉快^{えきげき}だね、本^{ほん}当^{とう}にこの現実^{げんじつ}は有^あり難^{がた}く^てしようがない。だから、

「私の信仰^{しんぎょう}は……」

なんて、そんなことを言^いうのが嫌^{きら}にな^ってしま^った。

「私は信仰^{しんぎょう}なんか有^ありませ^ないよ」



と言っている。

●原始力

24 さらば凡て我がこれらの言をききて行う者を、磐の上に家をたてたる慧
 き人に擬えん。 25 雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐
 の上に建てられたる故なり。 26 すべて我がこれらの言をききて行わぬ者を、
 沙の上に家を建てたる愚かなる人に擬えん。 27 雨ふり流れ漲り、風ふきて其
 の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし』

キリストという「千歳の岩」。さつき歌った讚美歌260番がそうです。

「千歳の岩よわが身を囲め……」

という。キリストという磐石の上に建つ。御霊という、もの凄い力、原始力、これを内側に頂く。この原始の力は原子爆弾以上の力だ。科学の物理の世界だと、我々の親指一本の大きさが持つ原子力で戦闘艦を動かすことができるという。

御霊の世界は、いくら御霊を頂いても、

「これでいい」

なんていう世界ではない。何がどうなっても、この御霊の生命を頂いた者は絶対に死なない。

「死んでも死なない」

と、キリストが仰ったとおり。御霊が来ると、病気が取っ付かないらしいから。

「東北伝道」(第九巻『感想と紀行』参照)の時に、私は癩病人に手を当てて祈った。あの牧師さんは驚いた、

「そんなことをして大丈夫か。こんな人は初めてだ」

と。話をする時に、癩病の方々と間に溝が在る。そんな溝は要らないから、私は中へ入って行つた。

ペニシリンのない時に、肺病といえば、大体いつ死ぬかというような病気だった。幾人もの方々が、病巣が固められて肺病が治まってしまつて、退院して外へ出て行つた。お医者者がびつくりするわけだ、

「どうして良くなったか」

と。一晩でその世界に入るから。或る人は嬉しくなつて、三日間で聖書を創世記から黙示録まで読んでしまった。読むのが一行ずつ読んでるのではないね、ああいう読み方は。パーツと写真みたいに写るらしい。そして、その内容がパーツと来るらしい。

私たちは読む時に漢字が混ざっている方が速い。かなばっかりは困る。私は、かなの本や余り口語的なものはダメだ。漢字が混じつたのはパーツと来るから、このページはこういうことだと分かる。殊に私の聖書を見てごらん。この通りいろいろ、色が付いている。スースーと、



「ああ、このページはこうだこうだ」と分かる。あまり奇麗な聖書はダメだ。親しんでくださいよ。私は「ドイツ語を勉強しろ」なんて言わない。

「ドイツ語に親しんでくれよ」と言う。

「イツヒ・リーベ・ドイチュ (私はドイツ語を愛する) 」

と、何でも愛さなければダメだ。愛の世界は楽しいんだ。それで、力が来てしまう。

● 霊的人物

28 イエスこれらの言を語りおえ給えるとき、**群衆その教に驚きたり。** 29 **それは学者らの如くならず、権威ある者のごとく教え給える故なり。**

権威ある者の「ごとく」ではない。権威ある者「らしく」語られた。神の権威です。私達はキリストの権威、聖霊の権威をもつて語る。について語るのではない。の中からものを言う。全部、告白である。皆さんは、本当にそのようにして、百花繚乱となってください。さつき、ソクラテスの言葉を言いました。

「世界を動かさんとする者は自ら動け」と。

「日本を動かさんとする者は自ら動け、行え、行じろ。本当の実存をせよ」

ということです。人がどうだこうだではない。

「我キリストの中に在るが故に動かざるを得ず」

ということ。中に入っただけではダメだ。本当に入れば、動かざるを得ない。人を助けざるを得ない。御霊の業を為さざるを得ない。全部これは、キリストの讚美であり、すべてがキリストの栄光を現すこと。これが本当の霊的ということ、「霊的人物」ということなんです。

そうでなくて、自分の名誉とか、自分の何かを誇るような事は、どんなに善きそうでも、これは「肉」であつて、「霊」ではない。ところが、一般のことは全部、その「肉」なんです。本当の霊の世界は**霊肉渾然**たる世界です。全存在的ですから。全存在的に神に在る。だから、力が来てしようがない。

「ああ、今日ほくたびれた」

なんて思わない。私は眠くはなるけど、「今日ほくたびれた」なんてまず思わないね。

